

大友時代を 生きた人々

鹿毛 敏夫

郭六官と呉老

写真は、長崎県平戸市の松浦史料博物館が収蔵する「松浦家文書」の「引書本付録十三番」に収められている、「法印公与暹羅国主書案」という名の史料になります。「法印」こと平戸の戦国大名松浦鎮信が、「暹羅」(タイ・アユタヤ朝)の「国王」(国王)に宛てた書状の案文(控文)です。

その日付は「天正五年正月吉日」、西暦1577年。鎮信は、天文18(49)年の生まれで、永禄11(68)年に元服、家督継承した際、豊後の大友義興(宗麟)に偏諱(敬すべき貴人の一字)を受けて「鎮信」を名乗っていました。

書状の中で鎮信は、アユタヤ朝からの国王使船が平戸に二度度渡海してきたことを感謝します。さらに、「もし日本の物御用の如くんば、欽言を奉つて叙す」と、国王が必要な日本の物

資をいつでも調達可能である旨を伝え、今後も「年々一舟を賜」え、千歳万歳と述べ、アユタヤー平戸間で毎年1隻の定期船の就航を提案しています。

16世紀、九州の戦国大名が東南アジアの国王と外交・交易関係を結ぶことを熱望していたことを示す史料といえます。では、国王の使節は、どのようにして日本の平戸までたどり着いたのでしょうか。

史料を詳しく読むと、この書状が発給される前年の天正4(76)年に、「郭六官宝舟」が平戸に着岸し、松浦氏と国王の間で交易がなされたことが分かれます。さらに、書状が出された同5(77)年にも「呉老宝舟」が来航し、再び両者の交易がなされたとあります。

「郭六官宝舟」「呉老宝舟」とは、それぞれ郭六官と呉老という中国人が操る貿易船という

平戸に来航した中国人船主

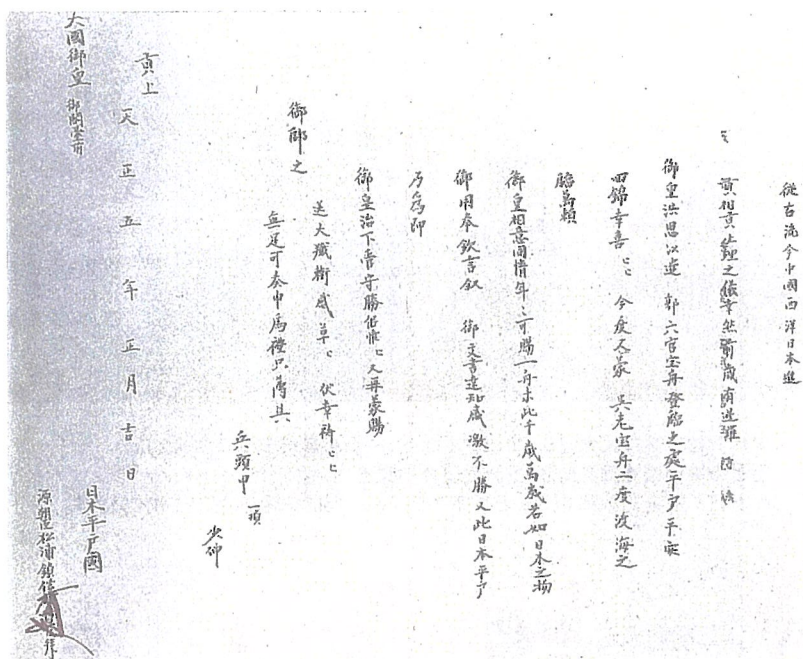
意味。つまり、使節は、中国人が操船するジャンクに乗って東南アジアから日本へと来航したのです。

平戸は、日本列島のほぼ最西端に位置する港町です。8〜9世紀、日本から中国に渡る遣唐使の船は、しばしば寄港して風待ちをしました。また、10〜14世紀に来航した唐や宋の商船の多くも、平戸や五島列島に立ち寄っています。

コスモポリタン・シティー(国際都市)平戸には、古くから東シナ海航路を往来する船が来航していたわけです。交易路が拡大した16世紀後半、アユタヤ国王の使節は、この航路を股にかけて活動する中国船を利用して日本との外交・交易関係を構築したのでした。

(名古屋学院大学国際文化学部長・教授)

11月1回掲載



法印公与暹羅国主書案 (松浦史料博物館蔵)